利他とは何か

中島岳志

コロナと利他

- マスクの着用
  →他者にうつさないために
- エッセンシャル・ワーカー
- 医療従事者への感謝
- クラウド・ファンディング
- 寄付

東京工業大学・未来の人類研究センター

- ２０２０年２月発足
- 「利他プロジェクト」

自己責任論と小さな政府

- 構造改革
- 官から民へ
- 規制緩和
  →「小さすぎる政府」に

・自己責任論
→生活保護バッシング

「利他」と「利己」

- 利己的行為の動機づけ
  - ・「ほめられたい 」
  - ・「名誉を得たい 」

  →利己的 ・我欲

・メビウスの輪としての「利他」と「利己」

→「聖道の慈悲」

頭木弘樹『食べることと出すこと』

潰瘍性大腸炎で食べられないものがある

仕事の打ち合わせで、相手から案内された店に行くと、お勧めの料理が既に注文されており、「これおいしいですよ」と勧められた。しかし、それは食べることができないもの。相手も頭木さんが難病を抱えていることを熟知している。

- 「すみません。これはちょっと無理でして」と返事をすると、一度は「ああそうですか。それは残念です」と引き下がってくれたものの、しばらくするとまた同じものを勧めてきて、「少しぐらいは大丈夫なんじゃないですか」と言う。手をつけずにいると、周りの人まで「これおいしいですよ」とか「ちょっとだけ食べておけばいいじゃないですか」と言い始める。

- 「おいしいものを食べさせたい」という利他的押しつけは、頭木さんにとっては恐怖でしかない。

いくら相手のことを想って行ったことでも、相手を自分の思い通りにコントロールしようとすることは、利己的な行為になる

相手の主体に沿うことが重要

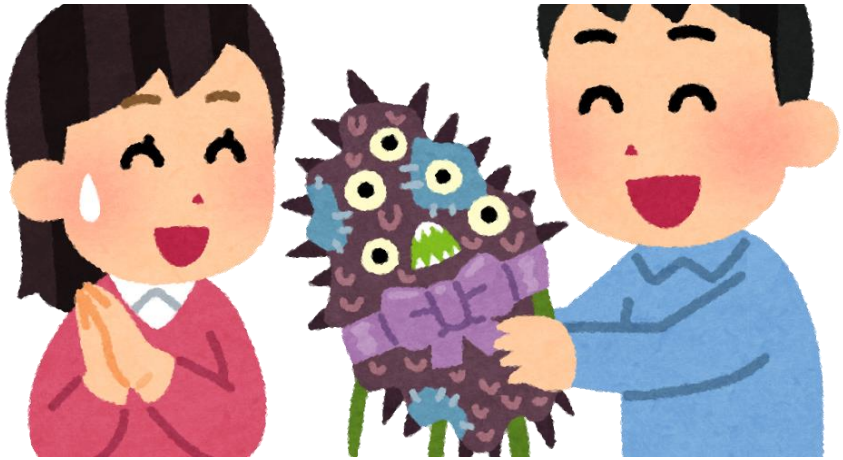
「NHKのど自慢」の伴奏

利他が成立するのは、受け手の潜在能力（ポテンシャル）が引き出されたとき

利他は受け取られることで起動する

- 「ありがた迷惑」という問題
- 利他は「与え手の意志」に還元されない

- 利他の時制
  - 「あの時の一言」



- 「弔い」と「利他」
  - すでに受け取っていることへの気づき

与格という文法

- インドのヒンディー語
  ・主格（～は）と与格（～に）

- 「私は嬉しい」
  →「私に嬉しさが留まっている」
- 「あなたを愛している」
  →「私にあなたへの愛がやって来て留まっている」

＊行為が意志の外部に規定されているとき、与格を用いる

言葉はどこからやって来るのか？

- 「ヒンディー語、できるの？」
  →与格を用いる

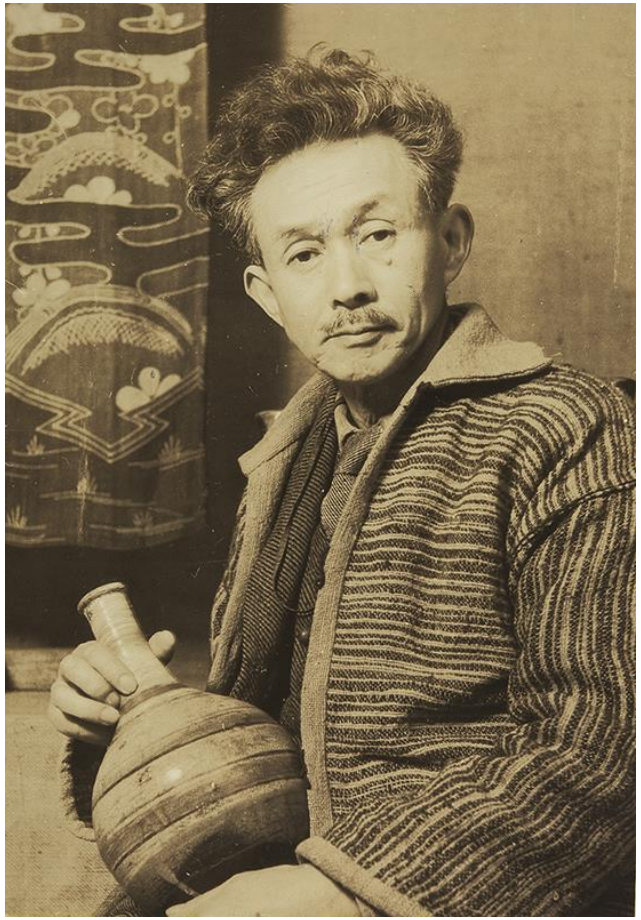
- 言葉は私にやって来る
- 「神」という源泉
- 私という器

- 主格と意思への懐疑

柳宗悦の「民芸」

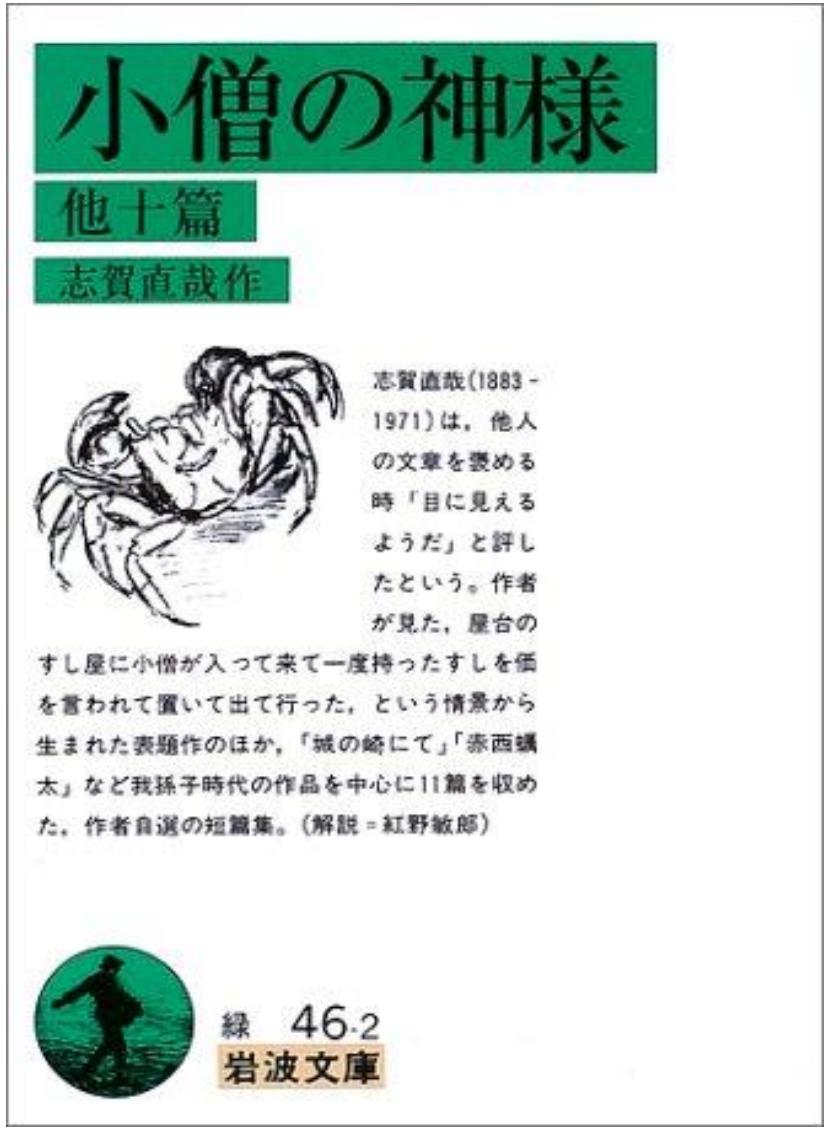
- 職人の世界
- 「美しく作ろう」という「計らい」の超克
- 無名性
- 「用の美」

- 「自ずから現れる美」＝「他力の働き」



志賀直哉「小僧の神様」

- Aに湧き上がる「変に淋しい気持ち」
- 「Aは変に淋しい気がした。自分は先日小僧の気の毒そうな様子を見て、心から同情した。そして、出来る事なら、こうもしてやりたいと考えていた事を今日は遂行出来たのである。小僧も満足し、自分も満足していい筈だ。」
- 「ところが、どうだろう、この変に淋しい、いやな気持ちは。何故だろう。何から来るのだろう。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持ちに似通っている。」
- 屋台で見かけたとき身が動かなかったこと、pity（哀れみ）



席を譲るとき

- 「どうしよう」と悩んでから、席を譲ったときに残るモヤモヤ
  →「偽善？」「哀れみ？」
  →「よい人に思われたい？」
  ⇒主格的行為

- 何も悩まず、即座に席を譲ったとき
  →身が動く。計らいを超える
  ⇒与格的行為

思いがけず利他

身が動く器になること